

小松先生との思い出

非常勤講師 古 橋 敬 一

小松先生の退職に際し、心より感謝の気持ちを込めて、この寄稿文を綴ります。

私は学生時代、事あるごとに小松先生の研究室を訪ねていました。いつからだったのでしょうか、ノックは決まって、トントトントン、トントンのリズムでした。小松先生は、どんなに忙しい時でも、私たち学生の訪問を温かく迎え入れてくれました。冷凍庫から出てくる茶葉は、古くなって、いつのものかわからなくなってしまったほうじ茶。でも、なぜか、それは甘露の味がしました。行きつけの研究室で、お茶を頂きながら、話を聞いてもらえる。一介の学生にとっては、ただ有り難く、幸せな時間でした。

先生は、私たちをよく大学からも連れ出してくれました。自然の中を散歩し、瀬戸や多治見の界隈を巡り、留学生と合宿をしました。赤提灯にも何度もかけました。会計の際は、「どうぞ、外でお待ち下さい」が、先生のいつものセリフでした。床についてしまいそうなレシートを見て、みんなで慌てて集金したこともありましたが、先生はいつも、「だって、金ないでしょう？ 稼げるようになったら、お待ちしています」と言って下さいました。

先生は、よくご自分の学生時代のお話もして下さいました。先生の中には、強烈な劣等感があり、それと向き合うことで、留学を経験し、カウンセリング心理学を専攻するに至ったこと。異文化を訪ねて自分自身に会うという体験が、原体験となり、文化や社会を人の心の問題として見つめる現在のお仕事につながっていること云々。

受験競争に馴染めず、一年浪人をして入学した私は、先生のお話しに大きな励ましをいただきました。落ちこぼれでも、金はなくても、人生は素晴らしい。自分がやるべき事に会い、それときちんと向きあっていれば、人は幸せでいられる。小松先生の存在に救われた学生は、私だけではなかったと思います。あの当時、小松先生の周囲には、かくも魅力的な不揃いの林檎たちが数多く集まっていました。そして、その多くが、公費の交換留学生に選ばれて、海を渡りました。留学は、それぞれの学生達にとっては、ちょっとした奇跡だったと思います。少なくとも、私にとって留学は、自分の人生を変える大きなきっかけとなりました。そしてそこには、間違いなく、小松先生から受けた薫陶がありました。

留学へ行く直前、先生からご紹介いただいた星野道夫さんの著作の中に、「Life is what happens to you while you are making other plans」という言葉を見つけました。人生とは、あなたが何かを計画しているときに起こってしまう別の出来事、とでも訳されるのでしょうか。何が起こるのかわからないのが人生、私たちは、今を精一杯生きるより他はない。留学へ向けて大きく深呼吸したことを今でも覚えています。そして、その呼吸は今も続いています。

人の心を見つめながら、文化とは、社会とは何かを考え続けてこられた先生のお仕事は、退職

されたこれからも変わらず続いていくでしょう。私は、それに学び続けます。小松先生のことを
想い、原稿に向かっていたら、外には雪景色が広がっていました。いつか、Alaska へご一緒した
いです。これからもどうぞよろしくお願いします。